

韓国の科学高校と日本の SSH の比較

仁川科学高校をはじめとする韓国の科学高校は、その設立の目的として明確に科学エリートの育成が考えられる。一握りの生徒を選抜して入学させ、潤沢な予算で大学研究室かと思間違ふような設備を用意し、理数科に特化したカリキュラムでその環境を十分に活用している。国内外の数学・科学コンクールに多数入選している実績もあり、科学高校における教育活動が単なる詰め込みでなく、質量共に充実した実践教育であることを示している。

もちろん授業時間数が普通の高校より多く、寮における深夜までの勉強時間なども含めて、彼らが非常に濃密な生活を送っていることは間違いないが、その成果もあって大学や KAIST への進学実績にも秀でたものがある。このように韓国の科学高校は、受験競争を勝ち抜く学力養成と、先端科学技術を操る科学実践教育の両立を、見事に果たしているといえる。それゆえ理工系大学による推薦入学も多く、大学側が教養課程の一部を省略できるようにするなど、大学や社会にとっても科学高校で教育を受けた生徒は貴重で価値ある存在なのだろう。ただし、生徒数の少なさからわかるように、こうした恩恵を受けることのできる生徒はごく少数であり、社会における科学技術従事者を増やしたり国民全体の科学リテラシーを向上させたりというよりは、一握りの科学エリートを育成する機関であるという捉え方ができる。

一方、日本の SSH は科学高校として設立したのではなく、既存の学校に文部科学省が SSH の指定を与え、3 年間という時限の中で研究開発を行わせるという施策がある。したがって、大学や社会における認知度や期待度も、韓国の科学高校に比べて低いと言わざるを得ない。

SSH で高度な科学技術に触れ科学研究活動を体験した生徒は、大学理工系学部にとっても魅力的な人材であるはずである。しかし入試制度一つとっても、慶應義塾大学をはじめ一部の大学が SSH に対する指定校推薦を設けているものの、全体として SSH を受けた生徒に恩恵があるとは言い難い。3 年間で SSH 事業が終了するという仕組みが、大学側の推薦枠拡大などの入試制度の変更を難しくしている面もある。しかし、受験勉強と科学研究活動を両立することは日本の学校教育システムでは容易なことではなく、大学進学を控えた高校生にとって SSH の研究活動を重視したプログラムは魅力的に映らないことが多い。

SSH では大学や研究機関との連携を謳っており、本校の SSH では慶應義塾大学をはじめ多くの大学や組織と連携し、幸いにして良好な関係を維持しながら研究活動を行っている。しかし一般論として、高校と大学・組織との連携では、往々にして高校が大学・組織に一方的にぶら下がり、大学・組織の側には負担の割合が大きいということになると想像される。もし SSH のような活動に 3 年間という時限がなく、継続的な交流が約束され、そこで育成された有望な人材がこれからずっと供給されるのであれば、さらなる連携や入学における優遇措置も可能になるのではないだろうか。